

国民学校初等科の国民科国史教科書『初等科国史』に対する基礎的考察

茨木 智志

はじめに

本稿の課題は、国民学校初等科の国民科国史のために編纂された『初等科国史』に対して、関連した文献を含めた書誌に関わる基礎的な考察を行なうことで、その教科書資料としての意義および歴史教育史における位置づけを明確にすることにある。

『初等科国史』は戦時中つまり戦前最後の国定第6期の初等国史教科書として知られている。1941年度から始まった国民学校の理念に合わせるため、従来の国史教科書の内容構成、文章表現、挿絵などすべてを改めて、全く新たな教科書として1943年に発行されたものであった。発行されてから修正版を含めて敗戦までの2年と数ヶ月という非常に短い期間の使用で役割を終えた国史教科書であるが、戦前の初等国史教科書の集大成的な意味を持った戦時下の歴史教育に関する資料として利用され、特にその記述内容を対象とした多くの研究が蓄積されてきた¹。

しかしながら、その文面の特殊さに注目するあまり、教科書資料としての基本的な考察が十分になされないままに利用されてきた側面がある。特に1943年版の教科書がどのような経緯を経て編纂されたのか、また1944年に発行された修正版がいかなるものであるのか、そして付随するいくつかの文献がどのように関連しているのかが明確ではなかった。そこで本稿では『初等科国史』および関連する文献に対する基本的な事項を精査することで、資料としての『初等科国史』の意義を明らかにすることに努め、これをもって歴史教育史および戦時教育の研究の一助としたい。

なお引用に際して漢字は新字体に直した。また翻刻発行本については筆者が現物を確認しえたもののみを掲載した。

¹ 『初等科国史』に関わる研究には次のようなものがある。唐澤富太郎『教科書の歴史』創文社、1956年。松島栄一「歴史教育の歴史」(『岩波講座日本歴史22別巻1』岩波書店、1963年)。海後宗臣『歴史教育の歴史』東京大学出版会、1969年。黒羽清隆「皇国史観の国史教育—第六期国定国史教科書を中心として—」(加藤章他編『講座・歴史教育1』弘文堂、1982年)。和歌森民男「国民科の中の国史教育」(同前書)。なお、その他の研究については以下の注記を参照されたい。

1. 2種類の『初等科国史』

『初等科国史』は、1943年に発行され、翌1944年に修正版が発行されたため、次のように2種類の児童用教科書が存在する。このうち1943年版は講談社の『日本教科書大系近代編』に収録されており²、また、ほるぷ出版³と大空社⁴からそれぞれ複製されている。

[1943年版]

①『初等科国史 上』、文部省、1943年2月17日発行

①-1、1943年3月15日翻刻発行、日本書籍⁵

①-2、1943年3月31日翻刻発行、東京書籍⁶

①-3、1943年4月17日翻刻発行、大阪書籍⁷

②『初等科国史 下』、文部省、1943年3月3日発行

②-1、1943年3月31日翻刻発行、東京書籍⁸

②-2、1943年5月3日翻刻発行、大阪書籍⁹

[1944年版]

③『初等科国史 上』、文部省、1944年2月18日修正発行

③-1、1944年3月15日翻刻発行、日本書籍¹⁰

③-2、1944年3月28日翻刻発行、東京書籍¹¹

④『初等科国史 下』、文部省、1944年3月14日修正発行

④-1、1944年3月31日翻刻発行、日本書籍¹²

² 海後宗臣編『日本教科書大系近代編 第20巻 歴史(3)』講談社、1962年。ここには海後氏によると思われる解題(473～475頁)が付されている。収録されたのは、上巻が1943年3月31日に東京書籍により翻刻発行されたものである。下巻については原本発行が1943年3月3日であることが記されているが、翻刻発行についての情報は明示されていない。

³ 『複製国定教科書(国民学校期)』ほるぷ出版、1982年。別冊の解説の中で家永三郎氏が国史の説明をしている。複製されたのは、上巻が1943年3月15日に日本書籍により翻刻発行されたもの(信濃教育博物館蔵)であり、下巻が1943年3月31日に東京書籍により翻刻発行されたもの(千葉県教育センター蔵)である。

⁴ 『複製国定歴史教科書』大空社、1987年。これには中村紀久二氏による別冊の解説が付されている。複製されたのは、上巻が1943年4月17日に大阪書籍により翻刻発行されたものであり、下巻が1943年5月3日に大阪書籍により翻刻発行されたものである。

⁵ 東書文庫所蔵(621-1-2)および、ほるぷ出版により複製されたもの(注3参照)。

⁶ 東書文庫所蔵(621-1-1および621-1-1イ)および前掲『日本教科書大系近代編 第20巻 歴史(3)』に収録されたもの(注2参照)。

⁷ 大空社により複製されたもの(注4参照)。

⁸ 東書文庫所蔵(621-1-1、621-1-1イ、621-1-1ロ、621-1-1ハ)および、ほるぷ出版により複製されたもの(注3参照)。

⁹ 大空社により複製されたもの(注4参照)。

¹⁰ 一橋大学附属図書館所蔵(Qf 446 上)。

¹¹ 東書文庫所蔵(621-1-4)。

上巻の構成は、「神勅」(1頁)、「御歴代表」(4頁)、「目録」(2頁)、本文(163頁)、「年表」(7頁)であり、下巻の構成は「神勅」(1頁)、「御歴代表」(4頁)、「目録」(2頁)、本文(189頁)、「年表」(9頁)である。これは1943年版と1944年版ともに同じである。いかなる修正が施されたのかは後述する。

各教科書の使用時期については、発行年月日から考えるならば、1943年度の5年生が1943年版上巻、1943年度の6年生が1943年版下巻、そして1944年度の5年生が1944年版上巻、1944年度の6年生が1944年版下巻、さらに1945年度の5年生が1944年版上巻、1945年度の6年生が1944年版下巻を使用したように思われる。国史以外の教科書についても1941年度に1・2年生用が、1942年度に3・4年生用が、1943年度に5・6年生用がそれぞれ発行されている。ただし佐藤秀夫氏は『初等科国史』について、上巻は1943年度の5年生が使用し、下巻は1944年度の6年生から使用されたと解説をしている¹³。この解説どおりに下巻が1943年度に使用されなかったならば、1944年度用には修正版が発行されるため、1943年版下巻は一度も使用されなかった教科書となる。佐藤氏は根拠を明示していないため、このことに関して、これ以上論ずることはできない。使用状況の詳細は今後の調査を待ちたい。

2. 『初等科国史』1942年「原案」の存在

前項で示したように、1943年版の原本発行は1943年2月(上巻)と3月(下巻)であるが、原稿の完成は前年の1942年であった。当時の国定教科書は原稿が完成すると、これを「原案」として教科用図書調査会に提出し、そこでの調査審議の上で可決されることが必要であった。この段階での『初等科国史』を仮に1942年「原案」と称することとする。

「原案」上巻は1942年8月21日に文相から教科用図書調査会に諮問され、27日に開催された教科用図書調査会第一部会(国民学校用教科書担当)で可決の決議がなされ、28日にその旨が第一部長から教科用図書調査会長に報告されている¹⁴。「原案」下巻は1942年9月21日に文相から教科用図書調査会に諮問され、25日に第一部会で可決の決議がなされ、その旨が26日に第一部長から教科用図書調査会長に、10月1日には同調査会長から文相に報告されている¹⁵。なお上下巻ともに第一部長から教科用図書調査

¹² 文教大学越谷図書館所蔵(M2-0-1944)。

¹³ 佐藤秀夫「解説 歴史篇」(仲新・稲垣忠彦・佐藤秀夫編『近代日本教科書教授法資料集成 第7巻 教師用書3 歴史・地理篇』東京書籍、1983年、661頁)。

¹⁴ 『昭和16年5月～昭和18年5月 教科用図書調査会書類綴』(国立公文書館、請求番号1-3A-032-07・昭59文部-02545-100)。

¹⁵ 同上。

会長への報告の時点で新聞発表がなされている。

第一部会での審議内容は非公開ということもあり、公には記録がなく、また可決を決議した旨の教科用図書調査会長への報告も「調査審議ノ結果原案ニ多少ノ修正ヲ加ヘ之ヲ可決シタリ尚希望ノ点ニ付テハ会議ノ席上ニ於テ当局ニ詳細陳述シ置キタリ¹⁶」という紋切り型の文言のみであるので、審議そのものの過程は不明である。現時点では1942年「原案」の現物が発見されていないため、修正の詳細も確認しえていない。ただし、その内容構成が、上巻は新聞報道¹⁷により、下巻は文部省作成の新聞発表用の資料¹⁸により確認できる。これによると、興味深いことに、一部の章・節の表題が1943年版とは異なっている(《資料1》参照)。1943年版の原本発行までの間に教科用図書調査会第一部会の「希望」に沿って何らかの修正が行なわれたことが推測される。

3. 『初等科国史』1944年修正版の位置付け

1943年に発行された『初等科国史』は、1年間の使用の後、翌1944年に修正版が発行された。この1944年版は『初等科国史』に対する研究において、意外なほど、注目されてこなかった。前述したように、戦後になって複製もしくは収録された3つの『初等科国史』はすべて1943年版である。もちろん戦前の6期にわたる国定歴史教科書の各期の始まりを取り上げることは当然のことであり、国民学校制度初の国史教科書でもある1943年版が持つ重要性は強調されるべきものである。しかしながら、修正の内容を調査すると1944年版こそが戦時体制下の初等国史教科書の完成版であると思えることができる。また当然ながら敗戦後に墨塗りを受けたのも1944年版であった。

これまで1944年版に対しては、中村紀久二氏が章・節の表題の改訂と本文等の修正箇所数を指摘していた¹⁹が、表中の記載ということもあり概略にとどまっていた。そこで本稿では1943年版と1944年版を比較して、両者の対照表を作成し、その「修正」の意味を検討することとした。

まず上で述べたように、章と節²⁰のいくつかの表題が修正されている(《資料1》参照)。上下巻に共通する「神勅」と「御歴代表」に変更はない。

¹⁶ 『初等科国史』1942年「原案」上巻に関する可決の「報告」(1942年8月28日付)から引用(前掲『昭和16年5月～昭和18年5月 教科用図書調査会書類綴』)。なお、すべての「報告」がこの文言で記されている。

¹⁷ 『朝日新聞』1942年8月29日。

¹⁸ 「初等科国史(上)ノ編纂ニツイテ」(前掲『昭和16年5月～昭和18年5月 教科用図書調査会書類綴』)。なお稿末に《資料5》として全文を収録した。

¹⁹ 中村紀久二『複製国定歴史教科書解説』(大空社、1987年)、第二表。

²⁰ それまでの国定国史教科書が「課」で構成されていたのに対して、『初等科国史』は「章」と「節」の構成を用いている。なお児童用教科書には「章」と「節」の名称はないが、教師用書等では、この名称で説明をしている。

本文、挿絵、年表に対する修正を上巻と下巻に分けて表にした(《資料2》および《資料3》参照)。なお表には記載しなかったが、1943年版では挿絵の表題が左から右に書かれていたものを、1944年版では右から左に書くように変更している²¹。

本文に対する修正は、比較的に大きな修正においても、各節の文字数の範囲内での修正にとどめており、多くは各段落の文字数内での修正となっている。そのため、ある表記の追加や削除により文字数を合わせるための前後の修正も散見される。《資料2》および《資料3》で示した1944年版における多くの修正は、読みやすさ、分りやすさを考慮した表記の修正、そして誤記等の訂正などの一般的な教科書記述の修正の他に、次のようなものがある。

第一に、「尊貴の方々」に関わる記述の修正が行なわれている。「尊貴の方々」とは「神々・天皇及び皇族の方々」を指す、教師用書に記載された「索引」での分類である(後述)。その中で、まず「尊貴の方々」への敬語の整備が徹底された。全体に難しい言葉を易しい言葉に置き換えている中で、「尊貴の方々」への敬語は児童には分りにくい言葉に取って替わっているものが見られる²²。これは「尊貴の方々」への敬意の表し方を、歴史学習を通じて教育する意図を盛り込んだものと考えられる。さらに「尊貴の方々」が歴史上の出来事に積極的な役割を果たしたことを1943年版よりも強調した記述に修正している²³。

第二に、歴史教材の位置づけに関わる記述の修正が行なわれている。特に、1943年版では文化財を政治状況と切り離して評価する傾向があったが、すべて天皇との関わりにおける位置づけに修正していることが注目される²⁴。また井伊直弼²⁵、幕末の長州藩²⁶、米英のアジアへの野心²⁷、日露戦争の目的と開戦の経緯²⁸などの記述に対する修正も興味深い。なかでも象徴的なのが、最後の一文である。1943年版では国民科国史の学習を次

²¹ 1943年版『初等科国史』が挿絵の説明等を左横書きにしていた点について、第5期までの教科書が右横書きであったこと、『初等科国史』でも右横書き(年表)と左横書き(挿絵)が併用されている部分があることを、6年生児童から投げられた疑問として『朝日新聞』が大きく取り上げていた(1943年5月5日、「横書」を科学するヨイコ 左右同居に迷ふ 教科書にこの不統一)。なお横書きを左右どちらにするかは1942年の国語審議会でも結論が出せなかった問題であった。

²² 例えば聖徳太子、以仁王の死について「おなくなりにな」という表現を「薨去あらせられ」る(資料2・37頁および92頁)と、また幼少の明治天皇に関して「御顔の色」を「御気色」(資料3・96頁)と変更している例などがある。

²³ 例えば源頼朝が「源氏の名誉のために」義仲を討たせたという記述を「後白河法皇の院宣を奉じ」て(資料2・95頁)と改め、また護良親王の活動の記述を新たに挿入している(資料2・125～126頁)などの例がある。

²⁴ 例えば藤原氏によって建てられた法成寺について、「りつばな」「すばらしい」という形容を、「はでな」「ぜいたくな」(資料2・76頁および78頁)と修正している。

²⁵ 資料3・91～92頁参照。

²⁶ 資料3・93～94頁参照。

²⁷ 資料3・109頁参照。

²⁸ 資料3・138頁参照。

のような文で締めくくっていた。

私どもは、一生けんめいに勉強して、正行のやうな臣民となり、天皇陛下の御ために、おつくし申しあげなければなりません²⁹。(下線は引用者)

1944年版では、この中の「臣民」を「忠臣」と書き改め³⁰、「臣民」であることにとどまらず、「忠臣」であるべきことを要求するようになった。この部分は、内容に関わる修正の性格を端的に表している。

第三に、挿絵に関わる修正がある。挿絵そのものを差し替えたものが2図³¹、一部を修正したものが6図³²、挿絵の題名を修正したものが4図³³である。『初等科国史』の特徴として一新された多くの挿絵を用いていることが挙げられるが、修正版発行に際しても、上で述べた二つの点を配慮したと思われる、いくつかの修正が施されている。また持ち物等を削除・訂正した一部修正は古代史・中世史の挿絵に集中している。この中には神功皇后に関わる挿絵への修正など興味深いものが多く、歴史表象の創造の観点からも今後の研究が待たれる。

以上の三点はすべて国史を貫くべき「正邪」の明確化を図ったものと見なすことが出来る。それは国民科国史の“理想”に到達するための教科書の修正であり、この意味で1944年版こそが戦時下の国史教科書の完成版であった³⁴。

4. 『初等科国史』の教師用書

戦前の国定初等国史教科書の教師用書はその性格から2つに分けられる。第一は特定の教科書をどのように教えるかを指示するための教師用書であり、第二は使用教科書を特定せず、教師が授業を行なうための参考書の役割を果たす教師用書である。第2期の国史教科書のために、上記の第一の形式の教師用書が発行されたが、その後は第3期から第5期にいたるまで、数度の改訂を経つつも、上記の第二の形式の教師用書が発行されてきた。しかし第6期である『初等科国史』に対しては上記の第一の形式の教師用書

²⁹ 『初等科国史 上』、文部省、1943年2月17日発行、1943年4月17日翻刻発行（大阪書籍）、188～189頁。

³⁰ 資料3・188～189頁参照。

³¹ 菅原道真に関わる絵を改め（資料2・73頁）、白虎隊の絵を「錦の御旗」に変更している（資料3・105頁）。

³² 資料2の5頁、13頁、21頁、25頁、27頁、159頁を参照。

³³ 資料2・63頁、資料3・21頁および171頁参照。

³⁴ 1944年度当初の教科書配送の遅れに関係して、文部省国民学校局総務課長が「修正に手数のかゝつたヨイコドモ、国史、工作、地理附図などの各冊も追かけて、でき上つてきましたから、…」(「教科書初等科は今月中に」『朝日新聞』1944年5月5日)と述べているように、『初等科国史』の修正が文部省にとっても時間と手間のかかる大きな作業であったことが窺える。なお1945年修正版の存在は確認されていない。

を復活させている。

『初等科国史』の教師用書は、児童用教科書の上下巻に対応して次の二つが発行された。なお抄録が東京書籍の『近代日本教科書教授法資料集成』に収められている³⁵。

⑤『初等科国史 上 教師用』文部省、1943年12月27日発行³⁶

⑤-1、1944年5月2日翻刻発行、東京書籍³⁷

⑥『初等科国史 下 教師用』文部省、1944年5月29日発行³⁸

⑥-1、1944年6月21日翻刻発行、日本書籍³⁹

上巻は「総説」(45頁)、「各説」(266頁)、「索引」(22頁)で構成されており、下巻は「総説」(45頁)、「各説」(339頁)、「索引」(22頁)で構成されている。このうち「総説」と「索引」は上下巻ともに全く同じ内容のものである。

「総説」では、国民科国史を『初等科国史』により指導する際の精神について、「一 国民科指導の精神」、「二 国民科国史指導の精神」、「三 国民科国史教科書」⁴⁰という構成で、詳しく説明をしている。また「索引」は児童用教科書の本文の索引である。この索引は「尊貴の方々」と「人名・地名 その他」の二つに分け、前者では「神々・天皇及び皇族の方々」を「奉掲」している。

「各説」は児童用教科書の目次に沿って、章の「要旨」、各節の「教材の趣旨」・「取扱の要点」・「参考資料」が掲載されている。特に、この中の「教材の趣旨」では、「指導上の留意事項」、「挿画」の説明、他の教科目との「連絡」について、細大漏らさず指示をしている。『初等科国史』の記述に込められた意図を分析するためには重要な部分である。

上記の⑤、⑥の教師用書はともに、児童用教科書の1944年修正版に対応したものである。このことは「各説」の「目録」の構成が児童用教科書の1944年版のそれと同じであることからすぐに分かる。原本発行の年月に注目すると、上巻は、修正版の児童用教科書が発行(1944年2月)されるよりも先に、修正版の解説をした教師用書が発

³⁵ 仲新・稲垣忠彦・佐藤秀夫編『近代日本教科書教授法資料集成 第7巻 教師用書3 歴史・地理篇』東京書籍、1983年。ここに収録された『初等科国史 上 教師用』に関しては、1943年12月27日原本発行(「非売品」)の奥付が示されている。また佐藤秀夫氏により「解題」が付されている(667～668頁)。

³⁶ 原本発行のものが国立国会図書館(263.6/372)と東書文庫(621.19-1-1および621.19-1-1イ)に所蔵されている。

³⁷ 東書文庫所蔵(621.19-1-2)。なお本書は1943年12月28日翻刻印刷、1944年1月8日文部省検査済となっている。

³⁸ 原本発行のものが東書文庫(621.19-1-1および621.19-1-1イ)に所蔵されている。

³⁹ 早稲田大学中央図書館所蔵(375 00227 2下)。

⁴⁰ この「三 国民科国史教科書」の中の「(一)編纂方針」と「(二)初等科国史」については、編纂主意を表した資料として松島栄一氏が論文中で収録している(松島栄一「『国民学校』における歴史教育—「初等科国史」の取り扱いを中心として—」『国民教育』第7号、国民教育研究所、1971年1月、96～103頁)。

行（1943年12月）されている。上記の⑤-1で示した上巻の翻刻発行を遅らせた理由はここにあると考えられる。このことは、1943年版の児童用教科書に対応した教師用書を編纂している過程で、もしくは発行する前に、修正版である1944年版を発行することが決まったために、教師用書も1944年版の児童用教科書に対応させたものと推測される。しかし修正版を発行した背景も含めて、詳しい経緯は確認しえていない。いずれにせよ1943年版に対する教師用書は発行されていない⁴¹。

5. 『初等科国史』の編纂趣意書

戦前の国定教科書は基本的に発行ごとに編纂趣意書が教師向けに作られていた。しかし国民学校の国定教科書に関しては、上述したように、編纂趣意の内容が教師用書の「総説」に含まれたため、編纂趣意書という形で発行されることはなかった⁴²。ただし編纂趣旨を説明したラジオ放送が行なわれ、その放送原稿をまとめるかたちで、いくつかの書籍が発行された。ここに『初等科国史』の編纂趣旨を述べた、次のような一文が掲載されている。なお、全文が東京書籍の『近代日本教科書教授法資料集成』に収められている⁴³。

⑦中村一良「初等科国史上・下」の編纂趣旨⁴⁴

ここには教科書作成の根本的な方針と各教材に対する位置づけが、文部省図書監修官・中村一良⁴⁵の意見を交えて示されており、『初等科国史』の研究にとって重要な資料である。注目すべきは、ここで説明しているのが1943年版の内容である点である。こ

⁴¹ 筆者がこの点にこだわるのは、前掲した『近代日本教科書教授法資料集成 第7巻 教師用書3 歴史・地理篇』の6頁（目次）と329頁（中扉）に「初等科国史 上 教師用（昭和十八年度以降使用）」（下線は筆者）と記載されているためである。同じく「初等科国史 下 教師用（昭和十九年度以降使用）」と並べて書かれており、1943年版の教師用書であるとの誤解を招きやすい。この記載の根拠が明示されていないため、詳しいことは分りかねるが、児童用教科書修正版との対照の未確認を原因とした誤記入であると思われる。

⁴² 仲新「解説」（仲新・稲垣忠彦・佐藤秀夫編『近代日本教科書教授法資料集成 第12巻 編纂趣意書2』東京書籍、1983年、786頁）。

⁴³ 仲新・稲垣忠彦・佐藤秀夫編『近代日本教科書教授法資料集成 第11巻 編纂趣意書1』東京書籍、1982年、704～716頁。

⁴⁴ 日本放送協会編『文部省国民学校五、六年教科書編纂趣旨と取扱ひ方』日本放送出版協会、1944年3月、87～100頁。

⁴⁵ 中村一良（1906～1976年）は京都帝国大学に入学し、西田直二郎のもとで史学を専攻した。1945年の敗戦直後に東京女子高等師範学校に日本史担当教授として転出し（代わりに同校教授の豊田武が図書監修官となり、『暫定初等科国史』の編纂に従事した）、お茶の水女子大学教育学部教授として1972年に停年退官している。（中村については『お茶の水女子大学百年史』（同刊行委員会、1984年、519～522頁）等を参照した。）

れが収録されている『文部省国民学校五、六年教科書編纂趣旨と取扱ひ方』の発行は1944年3月であるが、「序」ではこの間の経緯を次のように説明している。

日本放送協会では昨年も五、六年用新教科書刊行と同時に、学校放送「教師の時間」に於いて「新教科書解説講座」を設け、文部省図書監修官並に實際家の権威二十五氏に委嘱して、その編纂趣旨と取扱ひ方についての解説を放送した。この講座は各方面に非常な好評を博し、放送原稿を纏めて刊行することを要望される向も多いので、ここに放送者各位の補正を得て上梓することとした。⁴⁶

放送が「昨年」である1943年の何月に行なわれたのかは確認できていないが、1943年度において1943年版の『初等科国史』を用いて授業を行なう教師のために、その編纂趣旨を解説したものであることは間違いない。しかし実際に活字にされたのは1944年版の『初等科国史』発行の時期であった。しかも記述に対する1944年版の修正に向けての「補正」はなされなかったようである。ここに教師用書とのずれが生じている。このように、⑦の資料を用いる際には、発行時期と内容にずれがあることを確認しておく必要がある。

また時期は前後するが、1942年「原案」可決が報告された際に、新聞を通じて初めて『初等科国史』が新しい国史教科書として紹介された。上巻に関しては「国史に貫く聖戦の真姿⁴⁷」、「暗記の歴史を破り国史に盛る皇国魂⁴⁸」、下巻に関しては「歴史、音楽に時局色 国民学校五、六年用 世界一の教科書⁴⁹」、「少国民にも世界観を⁵⁰」、「国史に世界の動き⁵¹」などの見出しで取り上げられ、その編纂の方針や内容が報道された。国立公文書館には、文部省が用意した新聞発表用の資料が残されており、各紙はこれをもとに記事を作成したと思われる（《資料4》および《資料5》参照）。基本的には、⑦の編纂趣旨で述べられ、⑤・⑥の教師用書で主張された内容と比べて大枠での変更は見られないが、教科書編纂についての最初の説明として、その後の編纂趣旨説明に対する文部省の検討過程を見出すことができる⁵²。

⁴⁶ 前掲『国民学校五、六年教科書編纂趣旨と取扱ひ方』の「序」より。なお引用文中の「昨年も」というのは、前々年の1・2年用新教科書および前年の3・4年用新教科書の発行の際にも同様の放送を行なったことを指す。また国史の「取扱ひ方」については同書に東京高等師範学校訓導・宮腰他一雄が「五、六年国史の取扱ひ方」を執筆している（248～253頁）。

⁴⁷ 『朝日新聞』1942年8月29日。

⁴⁸ 『東京日日新聞』1942年8月29日。

⁴⁹ 『朝日新聞』1942年9月27日。

⁵⁰ 『東京日日新聞』1942年9月27日。

⁵¹ 『読売報知』1942年9月27日。

⁵² 一部の内容構成が1943年版と異なることは前述した。「章」・「節」の名称の不使用や「高岳親王」名の使用などの他に、文化面への言及の少なさなどが指摘できる。

まとめにかえて

本稿では『初等科国史』に対して、1942年「原案」の存在、1944年修正版が持つ意味や付随する文献との関わりを中心に、検討を進めてきた。なかでも1942年「原案」以来の修正を重ねた1944年版こそが戦時下における国史教科書の完成版の位置にあることを改めて強調しておきたい。また関連して、付随する教師用書や編纂趣意書がどの児童用教科書を対象としているかなど、研究資料としての基本的な性格を明示した。本稿は『初等科国史』の記述内容を直接の研究対象とはしていないが、以上の検討により、戦時教育と一言で表現される教育が、国史の場合、実際には何度も修正を加えられつつ展開されていたことを示す結果となった。

一方で、授業実践を含めた厳密な使用状況の調査、図書監修官である中村一良に関わる研究、教科用図書調査会など修正を文部省に強いた背景の検討等は、今後の課題として稿を改めたい。

(付記：教科書挿絵に関して御教示をくださった上越教育大学の松田慎也氏に感謝申し上げます。)

《資料1》『初等科国史』における章・節の表題の異同

- ・下線部は1943年版の表題を基準とした異同の該当箇所である。
- ・1942年「原案」の上巻は『朝日新聞』1942年8月29日(表中の番号の振り方は記事での記載通り)、下巻は「初等科国史(下)ノ編纂ニツイテ」(『昭和16年5月～昭和18年5月 教科用図書調査会書類綴』国立公文書館、請求番号1-3A-032-07・昭59文部-02545-100)による。1943年版と1944年版の書誌情報については本文を参照されたい。

		1942年「原案」		1943年版		1944年版	
上 巻	一 神国	高千穂の峯 榑原の宮居 五十鈴川	第一 神国	一 高千穂の峯 二 榑原の宮居 三 五十鈴川	第一 神国	一 高千穂の峯 二 榑原の宮居 三 五十鈴川	
	二 大和の国 原	かまどの煙 法隆寺 大化のまつりごと	第二 大和の国 原	一 かまどの煙 二 法隆寺 三 大化のまつりごと	第二 大和の国 原	一 かまどの煙 二 <u>飛鳥の都</u> 三 大化のまつりごと	
	三 奈良の都	都大路と国分寺 遣唐使と防人	第三 奈良の都	一 都大路と国分寺 二 遣唐使と防人	第三 奈良の都	一 都大路と国分寺 二 遣唐使と防人	

上 卷	四 京都と地方	平安京 太宰府 鳳凰堂	第四 京都と地方	一 平安京 二 太宰府 三 鳳凰堂	第四 京都と地方	一 平安京 二 太宰府 三 <u>世のさまざま</u>
	五 鎌倉武士	源氏と平家 富士の巻狩 神風	第五 鎌倉武士	一 源氏と平家 二 富士の巻狩 三 神風	第五 鎌倉武士	一 源氏と平家 二 富士の巻狩 三 神風
	六 吉野山	建武のまつりごと と 大義の光	第六 吉野山	一 建武のまつりごと 二 大義の光	第六 吉野山	一 建武のまつりごと 二 大義の光
	七 八重の潮路	金閣と銀閣 八幡船と南蛮船 <u>皇室と国民</u>	第七 八重の潮路	一 金閣と銀閣 二 八幡船と南蛮船 三 国民のめざめ	第七 八重の潮路	一 <u>戦をよそに</u> 二 八幡船と南蛮船 三 国民のめざめ
下 卷	第八 御代のしづめ	一 安土城 二 聚楽第 三 扇面の地図	第八 御代のしづめ	一 安土城 二 聚楽第 三 扇面の地図	第八 <u>御代のまもり</u>	一 安土城 二 聚楽第 三 扇面の地図
	第九 江戸と長崎	一 参勤交代 二 日本町 三 鎖国	第九 江戸と長崎	一 参勤交代 二 日本町 三 鎖国	第九 江戸と長崎	一 参勤交代 二 日本町 三 鎖国
	第十 <u>太平の世</u>	一 <u>御恵み</u> 二 名藩主 三 <u>大和心</u>	第十 御恵みのもと	一 大御心 二 名藩主 三 国学	第十 御恵みのもと	一 大御心 二 名藩主 三 国学
	第十一 <u>幕末の姿</u>	一 海防 二 尊皇攘夷	第十一 うつりゆく世	一 海防 二 尊皇攘夷	第十一 <u>やたげごころ</u>	一 海防 二 尊皇攘夷
	第十二 のびゆく日本	一 明治の維新 二 憲法と勅語 三 富国強兵	第十二 のびゆく日本	一 明治の維新 二 憲法と勅語 三 富国強兵	第十二 のびゆく日本	一 明治の維新 二 憲法と勅語 三 富国強兵
	第十三 東亜のまもり	一 日清戦役 二 日露戦役	第十三 東亜のまもり	一 日清戦役 二 日露戦役	第十三 <u>東亜のしづめ</u>	一 日清戦役 二 日露戦役
	第十四 世界のうごき	一 明治から大正へ 二 太平洋の波風	第十四 世界のうごき	一 明治から大正へ 二 太平洋の波風	第十四 世界のうごき	一 明治から大正へ 二 太平洋の波風

第十五 昭和の大 御代	一 満州事変 二 大東亜戦争 三 大御代の御栄え	第十五 昭和の大 御代	一 満州事変 二 大東亜戦争 三 大御代の御栄え	第十五 昭和の大 御代	一 満州事変 二 大東亜戦争 三 大御代の御栄え
-------------------	--------------------------------	-------------------	--------------------------------	-------------------	--------------------------------

《資料2》『初等科国史 上』の修正箇所対照表

- ・本文と挿絵、年表を対象とした。章・節の表題の変更は《資料1》を参照。
- ・削除・修正・追加の箇所を下線で示し、作成者による補足を【 】で示した。
- ・1943年版は1943年2月17日発行、同年4月17日翻刻発行（大阪書籍）の教科書を、1944年版は1944年2月18日修正発行、同年3月15日翻刻発行（日本書籍）の教科書をそれぞれ使用した。

1943年版	1944年版
(2～3頁) 大神は、高天原にいらつしやいました。稲・麦等五穀を植ゑ、蚕を飼ひ、糸をつむぎ、衣を織ることなどをお教へになりました。春は機を織るをさの音ものどかか、秋は瑞穂の波が黄金のやうにゆらいで、楽しいおだやかな日が続きました。私たちは「天の岩屋」や「八岐のをろち」のお話にも、大神の尊い御徳と深い御恵みを仰ぐことができます。	(2～3頁) 大神は、高天原にいらせられました。稲・麦等五穀を植ゑ、蚕を飼ひ、糸をつむぎ、衣を織つて神をまつことや、くらしのみちをお教へになりました。春は機殿で衣を織らせたまふ音もかうがうしく、秋は御田の瑞穂もゆたかこみのりました。私どもは、このやうなかずかずのことや「天の岩屋」のお話にも、大神の尊い御徳と深い御恵みとを仰ぐことができます。
(3頁) 大神は、…御子孫をこの国土にお降しになることを、お考へになつてみました。当時大八洲には、…	(3頁) 大神は、…御子孫をこの国土にお降しになることを、お考へになりました。そのころ大八洲には…
(4頁) 【出雲大社の振り仮名なし】	(4頁) 【出雲大社に「いづものおほやしろ」の振り仮名】
(5頁) 【挿絵「皇孫のお降り」】	(5頁) 【挿絵「皇孫のお降り」中の兵士が持つ盾の文様削除】
(6頁) 【天孫降臨のときに】空には五色の雲がたなびき、高千穂の峯は、ひときはかうがうしく仰がれました。	(6頁) 空には八重雲がたなびき、高千穂の峯は、ひときはかうがうしく仰がれました。
(13頁) 【挿絵「鳥見のおまつり」】	(13頁) 【挿絵「鳥見のおまつり」中の兵士の盾の文様削除】
(15頁) …国民は多くの氏に分れ、それぞれ一族のかしらにひきまられて、皇室に仕へてみたのであります。	(15頁) …国民は多くの氏に分れ、それぞれ一族のかしらにひきまられ、天皇にお仕へ申し上げてみました。
(16頁) 垂仁天皇も…あらたかな社殿をお造りなつて、…	(16頁) 垂仁天皇も…かうがうしいお宮をお造りなつて、…
(21頁) 【挿絵（神功）「皇后の御出発」】	(21頁) 【挿絵「皇后の御出発」の神功皇后の矢の削除、冠の変更】
(25頁) 【挿絵「三年ののち」（仁徳天皇）】	(25頁) 【挿絵「三年ののち」の中の笏など削除】
(26頁) 天皇はその後、池・溝・堤などを造つて、農業	(26頁) 天皇は、そののち、池や溝や堤などを造つて、

<p>をお進めになつたり、橋をかけ道を開いて、交通の発達をおはかりになつたりしました。</p> <p>(27頁)【挿絵「御養蚕」】</p> <p>(29頁) 朝廷に仕へるものは、…しぜん務めを怠りがちになり、中には、皇室の御恵みになれたてまつつて、わがまをふるまふものさへあります。</p> <p>(31頁) …人々の争ひを、なくしようとの思し召しに、</p> <p>(33頁) 太子はまた、新羅をしづめることをお考へになるとともに、かねがね、大陸に目をお注ぎになつてみましたので、…</p> <p>(36頁) …夢殿の前に立つと、<u>絵にもかきたい</u>八角の御堂の中に、…</p> <p>(37頁) 聖徳太子がおなくなりになると、…</p> <p>(37頁) 蝦夷は、生前に自分たち親子の墓を作つて、これを陵と呼び、入鹿は、その邸を宮といひ、子たちを王子と称しました。</p> <p>(38頁) …ふるひたれたのが、…中大兄皇子で、それをおたすけ申した人々のうち、…</p> <p>(38頁) 皇子は、…鎌足始め同志の人々と、…</p> <p>(40頁) …土地は全部奉還して、国民はこれを使はせていただくのであること、…</p> <p>(47頁) …御二代の間には、太安万侶らの苦心によつて、いよいよ古事記・日本書紀といふ国史の本が、りつぱにできあがりました。また、元明天皇の勅によつて、国々からは、…風土記といふ書をたてまつりました。</p> <p>(49頁) すつかりできあがるまでには、十年といふ長い年月がかりました。大仏は世界第一の金銅仏で、…</p> <p>(50頁) このころできた万葉集といふ和歌の本には、若鮎のやうにびちびちとした歌が、たくさん集つてゐます。</p> <p>(58頁) 奈良の御代御代は、かうして、平和のうちに過ぎて行きましたが、ここに思ひがけないことが、国の中に起こりました。それは、道鏡といふ悪僧の無道なふるまひです。</p> <p>(59～60頁) なみある朝臣は、すくはれたやうに、ほつとしました。</p> <p>(63頁)【挿絵「大極殿」】</p>	<p>農業をおすすめになり、また橋をかけ道を開いて、交通の発達をおはかりになりました。</p> <p>(27頁)【挿絵「御養蚕」の中の1つの容器を削除】</p> <p>(29頁) 朝廷に仕へるものは、…しぜん務めをおろそかにしたり、中には、皇室の御恵みになれて、わがまをふるまつたりするものがありました。</p> <p>(31頁) …人々の争ひを、<u>なくなさう</u>との思し召しに、</p> <p>(33頁) 太子は<u>かかねて</u>、新羅をしづめることをお考へになり、また大陸に目をお注ぎになつていらつしやいましたので、…</p> <p>(36頁) …夢殿の前に立つと、八角の御堂の中に、…</p> <p>(37頁) 聖徳太子が<u>薨去</u>あらせられると、…</p> <p>(37頁) 蝦夷は、<u>生前から自分ら親子の墓</u>を作つて、これを陵と呼び、入鹿は、その邸を宮といひ、<u>子ども</u>を王子と称しました。</p> <p>(38頁) …ふるひたれたのが、…中大兄皇子で、皇子をおたすけ申した人々のうち、…</p> <p>(38頁) 皇子は、…鎌足始め<u>心ある</u>人々と、…</p> <p>(40頁) …土地は<u>国民全部</u>が御民として新たに分けていただくのであること、…</p> <p>(47頁) …御二代の間に、いよいよ古事記・日本書紀といふ国史の本が、りつぱに<u>出来あが</u>りました。また、元明天皇の勅を奉じて、国々からは、…風土記といふ書をたてまつることになりました。</p> <p>(49頁) すつかり<u>出来あ</u>がるまでには、十年といふ長い年月がかりました。大仏は<u>世界に誇る</u>金銅仏で、…</p> <p>(50頁) このころできた万葉集といふ和歌の本には、<u>大和心のこもつた</u>、<u>明かるい</u>歌やをしい歌が、たくさん集つてゐます。</p> <p>(58頁) 奈良の御代御代は、かうして、<u>榮えに榮え</u>ましたが、<u>その終りに近くなつて</u>、<u>たいそうざんねんなこと</u>が起こりました。それは、道鏡といふ悪僧の無道なふるまひです。</p> <p>(59～60頁) なみある朝臣は、<u>すくはれたやうな</u>思ひがしました。</p> <p>(63頁)【挿絵「大極殿のおもかげ」】</p>
--	--

<p>(63 頁) …京都^①は日本の中心であり、京といへば京都をさす習はしも、この間にできました。</p> <p>(68～69 頁) 【真如親王は】 …不幸にも、途中でおなくなりになりました。</p> <p>(73 頁) 【挿絵「都の思ひ出」(菅原道真)】</p> <p>(76 頁) …頼通が…父道長のために、法成寺といふりつばな住居を建てました。</p> <p>(78 頁) 道長は、家門の榮えに満足して、これを望月にたとへたほどでした。法成寺はその後…焼けてしまひましたが、…<u>実にすばらしいものであつたことがわかります。</u></p> <p>(79～80 頁) 【鳳凰堂は】 <u>なだらかな屋根の勾配、すらりとのびた左右の翼廊、なるほど、鳳凰が大空を飛んでゐるやうな、美しい建物です。御堂の中にはいと、本尊を始め、扉の絵や欄間の彫刻など、何一つとして、やさしく美しい感じを与へないものはありません。じつと見つめてみると、藤原氏の榮華よりも、これを作つた人々のたくみなわざに、おどろかされます。さうして、どうしてこのころ、かういふりつばなものが作れるやうになつたかを、考へさせられます。</u></p> <p>(80～81 頁) 遣唐使がやめられてから、人々は、今までより、もつと日本人の精神にしつくり合ふものを、作らうとするやうになりました。かな文字がひろまり、和歌や物語などが発達したのは、みなかうした心や努力の結果であります。その中には、紫式部の作つた源氏物語のやうに、世界にすぐれた文学もあります。絵や彫刻や建物なども、だんだん日本人の心に合ふものになりました。鳳凰堂は、建物を始め、中のすぐれた仏像そのほか、いつさいをくめて、いよいよ美しい博物館であります。すべて、古く支那やインドから伝はつた習はしも、このころまでに、生まれかゝつたやうに、日本らしい美しさを見せるやうになりました。</p>	<p>(63 頁) …京都は日本の中心であり、<u>おごそかにもまた、みやびやかな都</u>でありました。</p> <p>(68～69 頁) …不幸にも<u>その途中、薨去</u>あらせられました。</p> <p>(73 頁) 【「恩賜の御衣」として挿絵を差し替え】</p> <p>(76 頁) …頼通が…父道長のために、法成寺といふ<u>はでなすまひ</u>を建てました。</p> <p>(78 頁) 道長は、家門の榮えをほこつて、これを望月にたとへたほどでした。法成寺はその後…焼けてしまひましたが、…<u>実にせいたくなものであつたことがわかります。</u></p> <p>(79～80 頁) <u>なだらかな屋根の勾配、すらりとのびた左右の翼廊、全体が、棟の両端に立つ鳳凰</u>さながらに、大空を飛んでゐるやうな感じですが、<u>これとあの青・赤・白の色もあざやかな奈良の都の建物</u>にくらべると、<u>そこには、よほどおちついたおもむき</u>があります。</p> <p>(80～81 頁) <u>このころ、朝廷にお仕へする、身分の高い人々の邸も、いつぱんに、寝殿造といふ、上品でやらかな感じの建て方</u>になりました。どうして、かういふこのみが現れたのでせう。遣唐使がやめられてのち、人々が、さらに日本人の<u>気持にしつくり合ふもの</u>を作らうと、心がけるやうになつたからです。</p> <p>すでに延喜の御代のころには、朝廷の御儀式や年中の行事などがよく整ひました。また古く支那やインドから伝はつた習はしでさへ、その後、生まれかゝつたやうに日本風の美しさを現して来ました。中でも注目しなければならぬのは、かな特にひらがなの使用がひろまつたこととせう。これを<u>用ひると、日常のことがそのままあらはせる、こまかな考へや感じも自由にのべる</u>ことができます。かうして、まづ和歌が目だつて盛んとなり、古今集を始め、勅撰の歌集が次々にあまれました。また物語も、したいに発達し、つひに紫式部の作つた源氏物語のやうに、世界にすぐれた文章さへ現れたのでありま</p>
---	---

<p>(81 頁) <u>はなやかな都の生活も、一面には、かうしたよいものを残してゐますが、ただ藤原氏が政治を怠つたのは、まことに困つたことであります。</u></p> <p>(83 頁) 【院政により】…摂政・関白の職も、名ばかりとなり、藤原氏の勢は、<u>どんどんおとろへて行きました。</u></p> <p>(89 頁) 平家の勢が盛んになり始めたのは、崇徳天皇の御代に、忠盛が瀬戸内海の内海を平げたところからです。</p> <p>(92 頁) …以仁王は、<u>流矢にあたつて、おなくなりになりました。</u>しかし「平家を討て」との王の御命令は、<u>水に投じた波紋のやうに、国々の源氏へひろがつて行きました。</u></p> <p>(94 頁) …あたりの沼で眠つてゐた水鳥が、<u>びつくりして、一度にぱつと飛びたちました。</u></p> <p>(95 頁) それを聞いた頼朝は、源氏の名誉のために、弟の範頼・義経に命じて、義仲を討たせました。</p> <p>(96 頁) 十六歳の若武者、平敦盛…</p> <p>(97 頁) そこで頼朝は、鎌倉の役所を整へ、ますます政治にはげみました。</p> <p>(100 頁) 曾我の十郎・五郎兄弟が、<u>父のかたき工藤祐経を討つて、仇討ちのほまれを世に残したのも、この時のことでした。</u></p> <p>(100～101 頁) しかし、かうした源氏の全盛も、頼朝がなくなると、もうあとが続かなくなりました。これまで、源氏を助けて来た、外戚の北条氏が、そろそろ、わがままをふるまふやうになつたからです。頼朝の長男頼家は北条時政に、次男実朝は頼家の子公暁に、その公暁は腹黒い北条義時に殺され、源氏は頼朝からわづか三代で、ほろびてしまひました。あとは、<u>まつたく北条氏の思ひ通りで、義時は、まづ朝廷にお願い申して、源氏の遠縁に当る藤原頼経を、名ばかりの鎌倉の主として迎へ、自分は執権といふ役目になつて、勝手なふるまひを</u>しました。</p> <p>(101～102 頁) <u>これでは、もう武士に政治をまかせておけないと、朝廷では、お考へになるやうになりました。</u>後鳥羽上皇は、義時をお討ちになる御決心から、兵をお</p>	<p>す。</p> <p>(81 頁) しかし、藤原氏が政治を怠つたのは、<u>何として</u>も、困つたことであります。</p> <p>(83 頁) …摂政・関白の職も、名ばかりとなりました。<u>かうして藤原氏の勢は、どんどんおとろへ、その栄華も夢のやうに、はかなく消えて行きました。</u></p> <p>(89 頁) 平家が盛んになり始めたのは、<u>崇徳天皇</u>の御代に、忠盛が瀬戸内海の内海を平げたところからです。</p> <p>(92 頁) …以仁王は、<u>おそれ多くも、流矢にあたつて、薨去あらせられました。</u>しかし「平家を討て」との王の命令は、<u>波紋のやうに、国々の源氏へひろがつて行きました。</u></p> <p>(94 頁) …あたりの沼で眠つてゐた水鳥が、<u>羽ばたきの音高く一せいに飛びたちました。</u></p> <p>(95 頁) <u>そこで頼朝は、後白河法皇の院宣を奉じ、弟の範頼と義経に命じて、義仲を討たせました。</u></p> <p>(96 頁) <u>十七歳の若武者、平敦盛…</u></p> <p>(97 頁) <u>そこで頼朝は、鎌倉の役所をととのへ、武家政治を始めました。</u></p> <p>(100 頁) 世に有名な曾我兄弟の仇討ちも、この時のことでした。</p> <p>(100 頁) <u>しかし源氏の勢も、これが絶頂でした。頼朝の死後、外戚の北条氏が頭をもたげたからです。</u>長男頼家は北条時政に、次男実朝は頼家の子公暁に、公暁は時政の子義時に殺され、源氏は、頼朝からわづか三代でほろびました。あとは北条氏の思ひ通りで、義時は、まづ朝廷にお願い申し、源氏の遠縁に当る藤原頼経を迎へて名ばかりの鎌倉の主とし、<u>自分は執権になつて、勝手なふるまひを</u>しました。</p> <p>(101～102 頁) 後鳥羽上皇は、かうした有様をごらんになり、承久三年、幕府をお討ちになる御決心から、兵をお召しになりました。それと知つた義時は、<u>すぐに大</u></p>
---	---

<p>集めになりました。それと知った義時は、急いで大軍を京都へさし向け、この御くはだてにあづかつた公家や武士を、斬つたり流したりしたばかりか、おそれ多くも、後鳥羽上皇を始め、土御門上皇・順徳上皇御三方を、それぞれ隠岐・土佐・佐渡へうつしたてまつりました。まことに、わが国始まつて以来、臣下として無道きはまるふるまひです。その後北条氏は、泰時や時頼が、ともに<u>身をつつしみ、政治にはげんで、義時の罪をつぐなふこと</u>につとめました。</p>	<p>軍を京都へのぼらせ、御くはだてにあづかつた公家や武士を、斬つたり流したりしました。そればかりか、おそれ多くも上皇を隠岐に、土御門上皇を土佐に、順徳上皇を佐渡におうつし申したのであります。まことに大逆の<u>しわざ、無道きはまるふるまひ</u>です。かくて後鳥羽上皇は、<u>波風に御心をならまされたまふこと約二十年、つひにその地でおかくれになり、順徳上皇も、これを聞き召して、御悲しみのうちに、やがておかくれになりました。</u>しかも北条氏は、この間、京都の六波羅に探題を置くなど、自分の勢力を固めることに気を配つてあつたのです。</p>
<p>(104 頁) 朝廷では、わが国が神国であること、武力や作戦によつて撃ち破ることのできないことを、蒙古におさとしにならうとしました。ちやうどそのころ、鎌倉では、北条時宗が執権となり、わづか十八歳ではありましたが、…</p>	<p>今三上皇をおまつりした摂津の水無瀬神宮にお参りして、はるかに承久の古をしのぶと、ただただ悲憤の涙にかきくれるばかりであります。</p>
<p>(109 頁) 【元寇】…朝廷では、敵国の降伏を全国の神社や寺々にお祈らせになり、…</p>	<p>(104 頁) 朝廷では、わが国が神国であること、武力や作戦を以て撃ち破ることのできない旨を、蒙古にさとさうと思し召しになりました。ちやうどそのころ、鎌倉では、北条時宗が執権であり、わづか十九歳ではありましたが、…</p>
<p>(116 頁) 【北条】高時は、かうしたくはだてが天皇の思し召しによることを知つて、無道にも、つひに兵を皇居にさし向けました。</p>	<p>(109 頁) …朝廷では、敵国の降伏を全国の神社や寺々に祈らしめたまひ、…</p>
<p>(118 頁) 赤坂城へは、護良親王が、やつとお見えになりました。</p>	<p>(116 頁) 高時は、かうしたくはだてが天皇の思し召しによることを知つて、無道にも、つひに兵を京都にさし向けました。</p>
<p>(124 頁) 【建武の中興】かうして、御親政のかがやかしい御代に立ちかへりました。天皇は、京都と地方の役所や役目を、新たにお定めになり、このたびのてがらと家がらにもとづき、人物を選んで、それぞれ役人にお用ひになりました。公家も武士も、ひとしく朝臣として、大政をおたすけ申しあげることになりました。足利尊氏のやうに、途中から官軍に降つたものでさへ、重い役目に任じられました。何といふありがたい思し召しでありませう。</p>	<p>(118 頁) 赤坂城へは、護良親王が、やがてお見えになりました。</p>
<p>(125 頁) 建武のまつりごとが始つて、二年しかたたないうちに、大変なことが起りました。</p>	<p>(124 頁) 天皇は、新たに役所や役目をお定めになり、このたびのてがらと家がらにもとづき、人物を選んで役人にお用ひになり、公家も武士も朝臣として、大政をお輔け申しあげることになりました。尊氏のやうに、途中から官軍に降つたものでさへ、重い役目に任じられました。</p>
<p>(125 頁) 【足利尊氏が】北条氏をうら切つて、朝廷に降</p>	<p>(125 頁) 建武のまつりごとが始つて、二年しかたたないうちに、大へんなことが起りました。</p>
	<p>(125 頁) さきに朝廷に降つたのは、さうした下心があ</p>

<p>つたのは、さうした下心があつたからです。<u>なんといふ</u> <u>不とどきな心がけてせう。</u></p> <p>(126頁)【<u>修正版で右の一段落を挿入</u>】</p> <p>(149頁)【<u>八幡船により</u>】山東・浙江・福建の諸地方などは、ほとんどいつさいが、根こそぎされる有様です。</p> <p>(159頁)【<u>挿絵「後奈良天皇の御写経」</u>】</p> <p>(160頁)【<u>後奈良天皇は</u>】また、皇大神宮の社殿をお造りかへになることにも、いろいろ御心をお用ひになりました。</p> <p>(161～162頁) 大内義隆・北条氏綱・上杉謙信・毛利元就・織田信秀とその子信長など、多くの英雄が、あるひは御儀式や御所修理の御費用をたてまつり、あるひは神宮をお造りかへになるお手伝ひをいたしました。</p> <p>(162頁) またこの間、三条西実隆・山科言継らの公家は、老の身をいとはず、苦しい旅を続けて、英雄たちに皇室の御やうすを伝へ、…</p> <p>(年表3頁) 大宝律令が<u>できあがる</u>。</p> <p>(年表3頁) 古事記が<u>できあがる</u>。</p> <p>(年表3頁) 日本書紀が<u>できあがる</u>。</p> <p>(年表3頁) 大仏が<u>できあがる</u>。</p> <p>(年表4頁) 法成寺が<u>できあがる</u>。</p>	<p>つたからです。</p> <p>(125～126頁) <u>護良親王は、早くも尊氏の悪心をお見抜きになり、これを除かうとせられました。しかし親王は、その御志もむなしく、尊氏兄弟のわるだくみのため、鎌倉にお移りになり、まだ二十八歳の御年で、申すもおそれ多い御最期をおとげになりました。鎌倉宮にお参りすると、今更のやうに足利氏をにくむ心がわき立つのであります。</u></p> <p>(149頁) 山東・浙江・福建の諸地方などは、ほとんどいつさいが、根こそぎになる有様です。</p> <p>(159頁)【<u>挿絵「後奈良天皇の御写経」</u>】の中で天皇が口と鼻を覆っていた覆面を削除】</p> <p>(160頁) また、皇大神宮の<u>御殿舎</u>をお造りかへになることにも、いろいろ御心をお用ひになりました。</p> <p>(161～162頁) 大内義隆・北条氏綱・上杉謙信・毛利元就・織田信秀とその子信長など、多くの<u>武将</u>が、あるひは御儀式や御所修理の御費用をたてまつり、あるひは神宮をお造りかへになるお手伝ひをいたしました。</p> <p>(162頁) またこの間、三条西実隆・山科言継らの公家は、老の身をいとはず、苦しい旅を続けて、<u>群雄</u>たちに皇室の御やうすを伝へ、…</p> <p>(年表3頁) 大宝律令が<u>出来あがる</u>。</p> <p>(年表3頁) 古事記が<u>出来あがる</u>。</p> <p>(年表3頁) 日本書紀が<u>出来あがる</u>。</p> <p>(年表3頁) 大仏が<u>出来あがる</u>。</p> <p>(年表4頁) 法成寺が<u>出来あがる</u>。</p>
---	--

《資料3》『初等科国史 下』の修正箇所対照表

- ・本文と挿絵、年表を対象とした。章・節の表題の変更は《資料1》を参照。
- ・削除・修正・追加の箇所を下線で示し、作成者による補足を【 】で示した。
- ・1943年版は1943年3月3日発行、同年5月3日翻刻発行（大阪書籍）の教科書を、1944年版は1944年3月14日修正発行、同年3月31日翻刻発行（日本書籍）の教科書をそれぞれ使用した。

1943 年版	1944 年版
<p>(5～6 頁) 【安土城】琵琶湖の眺めの美しい岡の上に、御代のしづめとうち建てられた七重の天守閣が、松のみどりをちりばめて、中空高くそびえ立ち、…</p>	<p>(5～6 頁) 琵琶湖の眺めの美しい岡の上に、<u>五層七重の天守閣が、都のまもりを固めるやうに</u>、松のみどりをちりばめて、中空高くそびえ立ち、…</p>
<p>(11 頁) 賤嶽の戦では、秀吉の部下、加藤清正・福島正則・片桐勝元ら七勇士が、槍を振るつてめざましく、戦ひ、…</p>	<p>(11 頁) 賤嶽の戦では、秀吉の部下、加藤清正・福島正則・片桐<u>且元</u>ら七勇士が、槍を振るつてめざましく、戦ひ、…</p>
<p>(16 頁) かうして、信長が御代のしづめになるやうにとまいた種は、秀吉によつて、みごとな花と咲いたのであります。</p>	<p>(16 頁) かうして、信長が御代の<u>まもり</u>になるやうにとまいた種は、秀吉によつて、みごとな花と咲いたのであります。</p>
<p>(20 頁) ところが、明の使節が持つて来た国書の中には、…無礼きはまる文句がありました。秀吉は大いに怒つて、その使ひを追ひかへし、再征の命令をくだしました。</p>	<p>(20 頁) ところが、明の使節が持つて来た国書の中には、…無礼きはまる文句がありましたので、秀吉は大いに<u>怒り、その使ひを追ひかへして</u>、再征の命令をくだしました。</p>
<p>(21 頁) 【挿絵「秀吉の扇」】</p>	<p>(21 頁) 【挿絵の表題を「扇面の地図」に変更】</p>
<p>(35 頁) …今のインド支那・タイ国フィリピンなどの各地に、日本町を立てて、…</p>	<p>(35 頁) …今のインド支那・タイ・フィリピンなどの各地に、日本町を立てて、…</p>
<p>(37 頁) …日本町の生活は、絵のやうに美しく、夢のやうにおだやかでした。</p>	<p>(37 頁) …日本町の生活は、<u>常夏の暑さにたへて、生き生きとしてみました。</u></p>
<p>(40 頁) 【天主教】幕府は、懸賞・踏絵・宗門改めなどの方法を用ひて、これを根だやししようとし、寛永七年には、洋書の輸入を禁止しました。</p>	<p>(40 頁) 幕府は、懸賞・踏絵・宗門改めなどの方法を用ひて、<u>これが根絶をはかり、更に寛永七年には、洋書の輸入を禁止しました。</u></p>
<p>(44～45 頁) 良雄の子良金も、年わづかに十五歳でこの挙に加り、めざましい働きを示しました。</p>	<p>(44～45 頁) 良雄の子良金も、年わづかに十五歳でこの挙に加り、めざましい働きを<u>致しました。</u></p>
<p>(47 頁) かうした白石の努力によつて、政治はふたたびひきしまり、<u>太平の世が続きました。</u></p>	<p>(47 頁) かうした白石の努力によつて、政治はふたたびひきしまりました。</p>
<p>(51 頁) 【幕府により天皇は】嵐山の桜が咲いても、高尾の紅葉が色づいても、これをごらんになることが、できなかつたのであります。</p>	<p>(51 頁) 嵐山の桜が咲いても、高尾の紅葉が色づいても、これを<u>御覧になることさへ、おできにならなかつたのであります。</u></p>
<p>(53 頁) 綱吉が将軍に任じられると、やがて朝鮮から、祝賀の使節が来ました。</p>	<p>(53 頁) <u>家宣</u>が将軍に任じられると、やがて朝鮮から、祝賀の使節が来ました。</p>
<p>(54 頁) 【挿絵「御恵みに感激して」】</p>	<p>(54 頁) 【挿絵の表題を「皇居を伏し拝む」に変更】</p>
<p>(58 頁) 【吉宗は】しもじもの生活を思ひやつて、自分も質素な生活を続け、産業を興して、よく領内を治めました。つねに皇室をうやまひ、…</p>	<p>(58 頁) しもじもの生活を思ひやつて、自分も質素な生活をいとなみ、産業をすすめて、よく領内を治めました。<u>常に皇室を敬ひ、…</u></p>
<p>(74～75 頁) 【高山彦九郎は】途中京都を通る時は、か</p>	<p>(74～75 頁) 途中京都を通る時は、<u>かならず御所を伏</u></p>

<p>ならず御所を伏し拝み、感涙をおさへることができませんでした。</p> <p>(76頁) 明治の御代、朝廷では、尊皇の志の厚かった、これらの人々に対し、その功をおほめになつて、それぞれ位をお授けになりました。</p> <p>(81頁) その後英艦は、しきりにわか近海に出没し、仁孝天皇の文政元年に、シンガポールを占領してから、…</p> <p>(91～92頁) かうして直弼は、攻撃の矢面に立ち、万延元年三月三日、つひに水戸の浪士におそはれて、桜田門外でたふれました。昨日は心ならずも志士を斬り、今日は思ひかけなく志士に刺される。わが国にとつてのよくよくの難局でありました。ともあれ、直弼の死によつて、幕府はその威厳を失ひ、尊皇攘夷をとなへる人々は、やがて幕府を倒さうと考へるやうになりました。</p> <p>(92頁) あれやこれやで、攘夷の氣勢は、わき立つばかりです。</p> <p>(93～94頁) ところが、このころ長州藩と薩摩・会津などの諸藩との間に、攘夷に対する意見のへだたりから、不和が起りました。朝廷でも、攘夷を一時お見合はせになりましたので、攘夷に熱心な長州藩は、すっかり面目を失ひ、志士はあせつて、大和や但馬で、尊皇攘夷の旗あげをする有様でした。</p> <p>(95頁) 【孝明天皇の】御代は、…二十一年、内外多事の折から、片時も御心をおやすめになるおひまありませんでした。</p> <p>(96頁) 【明治天皇は】まだ御幼少の御時、孝明天皇に従つて、御所の日の御門で、藩兵の演習をごらんになつたことがあります。百雷の一時に落ちるやうな大砲の響きに、人々はただ身をふるはせてあましたが、天皇は、御顔の色うるはしく、御熱心にごらんになつたといふことであります。</p> <p>(101～102頁) 【明治天皇は】…かしこくも、鳳輦を各地におとどめになつて、民草の生業にいそむ有様をごらんになりました。</p> <p>(103頁) 【明治天皇は】…即位の礼と大嘗祭とは、特に京都で行ふことにお定めになり、…</p> <p>(104～105頁) …孝明天皇の御妹、静寛院宮の御とり</p>	<p>し拝み、感涙をとどめることができませんでした。</p> <p>(76頁) 明治の御代、朝廷では、尊皇の志の厚かった、これらの人々に対し、その功をおほめになつて、それぞれ位を賜りました。</p> <p>(81頁) その後英艦は、しきりにわか近海に出没し、^西仁孝天皇の元年に、シンガポールを占領してから、…</p> <p>(91～92頁) 直弼は、<u>国難に際してなほ幕府の面目に</u>こたはり、おそれ多くも大御心をなやまし奉つたばかりか、幾多忠良の士を書しました。かくて万延元年三月三日、水戸の志士らは、つひにたち、時ならぬ雪をつけて、<u>桜田門外に直弼を斬りました。</u>大老がたふれて、幕府は一時に威信を失ひました。尊皇攘夷をとなへる人々は、やがて幕府を倒さうと考へるやうになりました。</p> <p>(92頁) <u>それやこれやで、攘夷の氣勢は、わき立つばかりでした。</u></p> <p>(93～94頁) ところが、このころ長州藩と薩摩・会津諸藩との間に、攘夷に関して、不和が起りました。かくて朝廷では、攘夷を一時お見合はせになりました。長州藩は、つつしんで朝旨を奉じました。ただ志士は、やむにやまれず、大和・但馬で尊皇攘夷の旗をあげ、討幕の先駆となつて、いさぎよく散りました。</p> <p>(95頁) 御代は、…二十一年、内外多事の折から、御心をおやすめになるおひまなど、片時もおありになりませんでした。</p> <p>(96頁) まだ御幼少の御時、孝明天皇に従つて、御所の日の御門で、藩兵の演習を御覧になつたことがあります。百雷の一時に落ちるやうな大砲の響きに、人々はただ身をふるはせてあましたが、天皇は、御気色もうるはしく、御熱心にごらんになつたといふことであります。</p> <p>(101～102頁) …かしこくも、鳳輦を各地におとどめになつて、民草の生業にいそむ有様を御覧になりました。</p> <p>(103頁) …即位の礼と大嘗祭とは、特に京都で行ふおきてをお定めになり、…</p> <p>(104～105頁) …孝明天皇の御妹、静寛院宮の御とり</p>
--	---

<p>なしがあり、やがて慶喜の家臣勝安芳・山岡鉄太郎の努力と隆盛の真心とによつて、慶喜は罪をゆるされ、江戸の市民は、兵火の災害から、まぬかれることができました。</p> <p>(105 頁)【挿絵「白虎隊の最期」】</p> <p>(105～106 頁) 会津の白虎隊と名づける少年の一団が、はなばなしく戦つて、次々に討死し、わづかに残つた十九人が、飯盛山にのぼり、はるかか城を望みながら、たがひに刺しちがへて、けなげな最期をとげたのは、この時のことです。</p> <p>(109 頁) ちやうどこのころ、ドイツやイタリアも、新しく生まれかへり、イギリス・フランス・ロシアなどと張り合ふつになりました。</p> <p>(136 頁) 明治三十二年、義和団といふ暴徒が起ると、清の政府は、ひそかに兵を出してこれを助け、北京にある各国の公使館を囲ませました。翌三十三年に入つて、さわぎは、ますます大きくなり、わが公使館の人々も殺傷される有様です。</p> <p>(138 頁)【日露開戦】そこでわが国は、三国干渉以来の非道をこらしめるため、明治三十七年二月、決然として国交をたちました。早くも、わが艦隊は、旅順・仁川の港外に、敵艦を撃沈して敵の出鼻をくじき、二月十日、宣戦の大詔がくだされました。</p> <p>(144 頁)【日露戦争の】…戦勝によつて、わが国は、世界における地位を、諸外国にはつきりと認めさせるとともに、東亜のまもりに重きを加へ、これまで欧米諸国に圧迫されて来た東亜諸民族の自覚をうながし、これを元気づけたのであります。</p> <p>(148 頁) …天皇は、明治四十五年七月、御病におかかりになりました。</p> <p>(150 頁)【明治天皇は】…その御心を、照るにつけもるにつけて思ふかなわが民草のうへはいかゞこととおよみになつていらつしやいます。</p> <p>(171 頁)【写真「満州国皇帝の御答礼」】</p> <p>(177 頁) わが国は、東亜をりつばな東亜に立て直すこ</p>	<p>なしがあり、やがて慶喜の家臣勝安芳・山岡鉄太郎の努力と隆盛の真心とによつて、慶喜は罪をゆるされました。江戸の市民も兵火の災害から、まぬかれることができました。</p> <p>(105 頁)【挿絵「白虎隊の最期」を「錦の御旗」に変更】</p> <p>(105～106 頁) 会津の白虎隊と名づける少年の一団が、<u>勇ましく</u>戦つて、次々に討死し、わづかに残つた十九人が、飯盛山にのぼり、はるかか城を望みながら、たがひに刺しちがへて、けなげな最期をとげたのは、この時のことです。</p> <p>(109 頁) ちやうどこのころ、<u>アメリカ大陸横断鉄道やスエズ運河が開通して、米・英両国の東洋に対する欲望</u>が一段と高まりました。</p> <p>(136 頁) 明治三十二年、義和団といふ暴徒が起りました。<u>翌三十三年になると、清の政府は、兵を出してこれを助け、北京にある各国の公使館を囲ませました。</u>さわぎは、ますます大きくなり、わが公使館の人々も殺傷される有様です。</p> <p>(138 頁) <u>しのひこしのんだわが国も、事ここに至るや、帝国の防衛と東洋保全のため、決然として国交をたちました。明治三十七年二月十日、宣戦の大詔がくだりました。わが艦隊は、早くも旅順・仁川の港外に敵艦を撃沈して敵の出鼻をくじきました。</u></p> <p>(144 頁) …戦勝によつて、わが国は、世界における地位を、諸外国にはつきりと認めさせるとともに、東亜の<u>しづめ</u>に重きを加へ、これまで欧米諸国に圧迫されて来た東亜諸民族の自覚をうながし、これを元気づけたのであります。</p> <p>(148 頁) …天皇は、明治四十五年七月、御病におかかり<u>せられました。</u></p> <p>(150 頁)【明治天皇は】…その御心を、照るにつけもるにつけて思ふかなわが民草のうへはいかゞこととおよみになつて<u>いらせられます。</u></p> <p>(171 頁)【写真「満州国皇帝の御答礼」の表題を「栄えゆく大御代」に変更】</p> <p>(177 頁) わが国は、東亜をりつばな東亜に立て直すこ</p>
---	---

<p>とを使命とし、独・伊は、欧州を正しい欧州に造りかへることを使命とする、<u>一三国</u>は、この大業をなしとげるため、たがひに助け合ふことになつたのです。</p> <p>(182 頁)【満州国】皇帝は、<u>かねがね</u>、わが皇室の御徳をおしたひになり、日本と同じやうに<u>満州国</u>を治めたいとお考へてでありましたので、…天照大神をおまつりになつて、…</p> <p>(184～185 頁) 御恵みのもと、世々の国民は、天皇を現御神とあがめ、国の御親とおしたひ申しあげて、忠誠をはげんで来ました。その間、<u>皇恩</u>になれ奉つて、わがままをふるまひ、太平に心をゆるめて、内わもめをくり返し、時に無恥無道の者が出たことは、何とも申しわけのないことであります。</p> <p>(188～189 頁) 私どもは、一生けんめいに勉強して、正行のやうな臣民となり、天皇陛下の御ために、おつくし申しあげなければなりません。</p> <p>(年表 4 頁)【「文政五年」に「蒲生君平が山陵志を作る」】</p>	<p>とを使命とし、独・伊は、欧州を正しい欧州に造りかへることを使命とする。<u>三国</u>は、この大業をなしとげるため、たがひに助け合ふことになつたのです。</p> <p>(182 頁) 皇帝は、<u>かねがね</u>、わが皇室の御徳をおしたひになり、<u>親邦</u>日本と同じやうに国を治めたいとお考へてでありましたので、…天照大神をおまつりになつて、…</p> <p>(184～185 頁) 御恵みのもと、世々の国民は、天皇を現御神とあがめ奉り、国の御親とおしたひ申しあげて、忠誠をはげんで来ました。その間、<u>皇恩を忘れて</u>、わがままをふるまひ、太平に心をゆるめて、内わもめをくり返し、時に<u>大義を乱す者</u>が出たことは、何とも申しわけのないことであります。</p> <p>(188～189 頁) 私どもは、一生けんめいに勉強して、正行のやうな忠臣となり、天皇陛下の御ために、おつくし申しあげなければなりません。</p> <p>(年表 4 頁)【「蒲生君平が山陵志を配る」と改めて、「文化五年」とする。】</p>
--	--

《資料 4》『初等科国史』1942 年「原案」上巻の編纂趣旨：「初等科国史(上)ノ編纂ニツイテ」

1942 年 8 月 27 日起案の「新聞発表案」に添付されたもの。わら半紙にガリ版刷り。原文は縦書き。
 (『昭和 16 年 5 月～昭和 18 年 5 月 教科用図書調査会書類級』国立公文書館、請求番号 1-3A-032-07・昭 59 文部-02545-100)

「初等科国史(上)ノ編纂ニツイテ

国民科国史ハ、国民科修身、国語ヲ母胎トシテ分化セルモノナレバ、初等科国史ノ編纂ニ当リテハ、全体ノ構成、教材ノ選択等、スベテ修身、国語トノ有機的関連ヲ重ンジ、国民科ノ一分野トシテノ国史ノ面目ヲ發揮スルコトニ努メタリ。ソノ構成ハ、マツ国運進展ノ過程ヲ示ス十五ノ題目ヲ重点的ニ排列シ、各題目ニハ、コレヲ具体化スルニ或ハ三ノ項目ヲ配当セリ。例ヘバ第一課ヲ「神国」トシ、コレヲ分ツテ(一)高千穂の峰(二)樫原の宮居(三)五十鈴川ノ三項トナセルガ如シ。文章ハ新タニ敬体口語ヲ用ヒ、児童ヲシテ親シミ易カラシムルトモニ、教材ノ選択ニ当リテハ、既ニ修メタル「郷土ノ観察」トノ連絡ニ留意シ、史蹟・遺物ノ類ヲ多ク収メテ、国史ノ修得ヲ具体的ナラシムルヤウ工夫セリ。初等科国史(上)ニ於ケル教材選択ノ基準及ビ教材ノ例ヲ示セバ、概ネ左ノ如シ、

- 一、歴代天皇ノ聖徳・鴻業、皇室ノ御仁慈ヲ景仰シ奉ルコトヲ根本トス
- 一、神国意識ノ啓培 例 神国 神風

- 一、大義名分ノ闡明 〃 清麻呂ノ忠誠 大義ノ光 (吉野ノ忠臣)
- 一、海外発展ノ強調 〃 遣唐使 高岳親王 八幡船
- 一、国防觀念ノ育成 〃 防人 太宰府
- 一、尚武ノ鼓吹 〃 富士ノ卷狩
- 一、創造力ノ涵養 〃 法隆寺 奈良ノ大仏
- 一、ソノ他、日滿親善、南方発展ヲ始メ、海国日本ノ面目ヲ示シ大東亜建設ノ意図ト相通ズル教材ハ、努メテコレヲ掲載セリ。
- (註 例示セル教材ハ、課ノ題目アリ、項目アリ、単ナル教材アリテ、大小不揃ナリ。)

《資料5》『初等科国史』1942年「原案」下巻の編纂趣旨：「初等科国史(下)ノ編纂ニツイテ」

1942年9月25日起案の「新聞発表案」に添付されたもの。わら半紙にガリ版刷り。原文は縦書き。
 (『昭和16年5月～昭和18年5月 教科用図書調査会書類綴』国立公文書館、請求番号1-3A-032-07・昭59文部-02545-100)

「 初等科国史(下)ノ編纂ニツイテ

編纂ノ根本方針ハモトヨリ、教材選択ノ基準及ビ排列ノ方法、ソノ他、表現ノ様式等スベテ(上)ノ巻ニ同ジ。シカモ(下)ノ巻ニ於テハ、広ク世界的視野ニ立チテ、皇国進展ノ様相ヲ東亜情勢トノ緊密ナル関連ノモトニ記述スルト共ニ、欧米特ニ米・英・蘭諸国ノ東亜侵略ノ経緯ヲ明ラカニスルタメ、海外史実ヲ増加シ、ソノ非道ヲ糾明シテ大東亜戦争ノ因由ヲ究メ、皇国ノ使命ノ自覚ニ導クコトニ重点ヲ置ケリ。乃チ題目ヲ立テルコト概ネ次ノ如シ。

第八 御代のしづめ

- 一、安土城 二、聚楽第 三、扇面の地図

第九 江戸と長崎

- 一、参勤交代 二、日本町 三、鎖国

第十 太平の世

- 一、御恵み 二、名藩主 三、大和心

第十一 幕末の姿

- 一、海防 二、尊皇攘夷

第十二 のびゆく日本

- 一、明治の維新 二、憲法と勅語 三、富国強兵

第十三 東亜のまもり

- 一、日清戦役 二、日露戦役

第十四 世界のうごき

- 一、明治から大正へ 二、太平洋の波風

第十五 昭和の大御代

一、満州事変 二、大東亜戦争 三、大御代の御栄え

マヅ「御代のしづめ」ニ於テ、信長・秀吉ノ功業特ニ秀吉ノ雄図ヲ偲ビ、「江戸と長崎」ニ移ツテ、鎖国ニ至ル事情ト南洋日本町ノ盛衰ヲ述ブ。「太平の世」ニ於テハ、御代御代ノ御高德ヲ景仰シ、名藩主ノ治蹟、科学ノ発達ヲ記シ、日本の諸学及ビ尊王思想ノ勃興ヲ述ベテ、皇国ノ伝統ヲ明ラカニシ、「幕末の姿」ニ移ツテ、幕末ノ内外情勢ヲ大観ス。ツイデ「のびゆく日本」ニ入ツテ、マヅ復古維新ノ本義ヲ闡明シ、開国日本ノ門出ヲ回想スルト共ニ、政治、教育、国防、産業等ニ互リテ国力ノ充実ヲ記ス。更ニ「東亜のまもり」「世界のうごき」ト重ネ、明治大正時代ニ於ケル国威宣揚ノ事歴ヲ通シテ、東亜保全・世界平和ノ確立ニ対スル我が積年ノ努力ヲ偲ブ。カクテ「昭和の大御代」ヲ迎ヘテ、満州事変ヲ契機トスル皇国ノ奮起ヲ説キ、支那事変ノ真相、大東亜戦争ノ因由、戦況ヲ記シテ、尽忠奉公ノ精神ヲ涵養セシムルコトトセリ。

教材ノ選択、排列、解釈等ニ関シ、特ニ留意セル所ハ次ノ二点ナリ。

一、従来所謂江戸時代ノ記述内容ガ、動モスレバ幕府本位ニ奔ル傾キアリタルニヨリ、之ヲ是正シテ御代中心ノ觀念ヲ明徴ニシタル点。自ラ「諸大名」ノ如キモ、「国のつかさ」トシテノ面ヲ強調シテ取扱フコトトセリ。

一、現下ノ情勢ハ、児童ヲシテ、素朴乍ラモ、世界史的関連ニ於テ事象ヲ把握セシムル地盤トナレリ。ヨリテ、東亜及世界ノ史実ニシテ皇国ノ進展ニ関係深キモノハ、成ルベク豊富ニ採択スルコトトセリ。三国干渉、日英同盟等ノ解釈ニツイテモ、コノ点ニ鑑ミテ当時ノヨーロッパ事情ヲ織リ込ムヤウ工夫シアリ。

」